橘　弘志（実践女子大学）

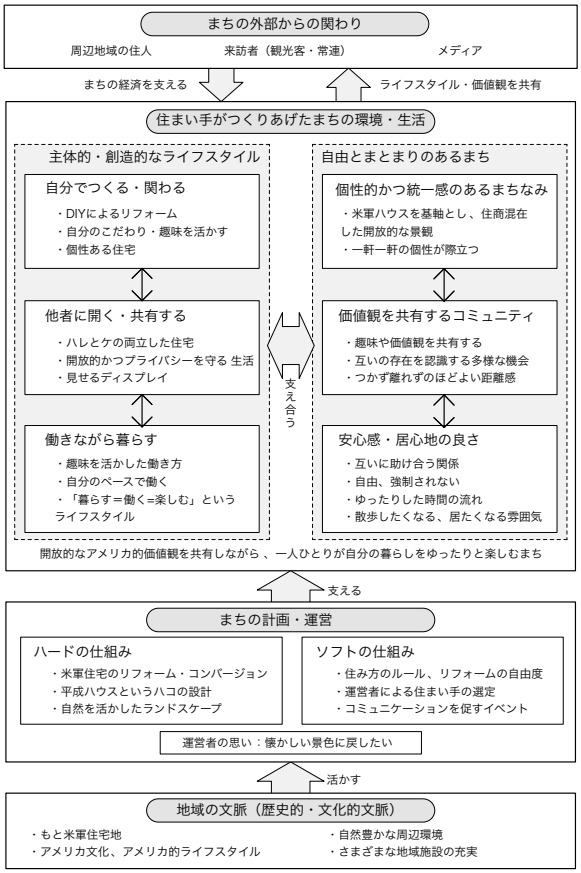
実践女子大学空間デザイン研究室　2016 年度卒業論文

■ジョンソンタウンの暮らしからみるひとつの住まいのあり方

入間市ジョンソンタウンは、米軍住宅跡地を活用した住宅地で、お洒落な街並みに惹かれる来訪者も多い。この街の魅力とライフスタイルに着目し、タウン内で働きながら、運営者、設計者および居住者／出店者 22 人にヒアリングを行った。

まちの魅力として「個性的かつ統一感のあるまちなみ」「価値観を共有するコミュニティ」「安心感・居心地の良さ」が見出された。来訪者を引きつけるとともに、居住者にとって安心して住める街と言える。こうした街の魅力を支えているのは、(1) 住まいに対しても街に対しても自分で関わりつくり出そうとする、(2) 外部に対して開放的で、他者と価値観を共有しようとする、(3) 暮らすこと＝働くこと＝楽しむことを目指す、という居住者自身のライフスタイルである。街のデザインや運営も、こうしたライフスタイルを実現させることを意図している。

現代の生活は、住居と労働と余暇を分離し、対価に対してなるべく大きな経済的価値を享受しようとする、いわば消費者的な価値観が支配的である。ジョンソンタウンのライフスタイルは、こうした現代的価値観に対するひとつのアンチテーゼであり、問題意識を浮かび上がらせるものと言える。



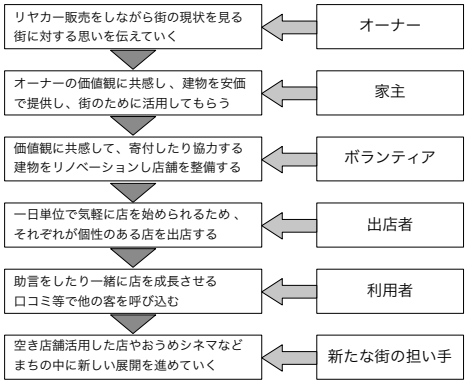
■シェアカフェが地域に与える影響

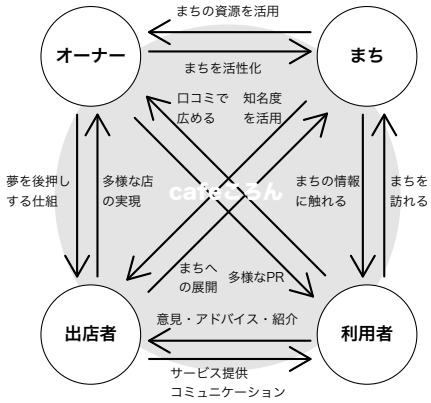
青梅市にある「cafe ころん」は、1 日単位で誰でも出店できるシェアカフェとして運営されている。そのユニークな仕組みと地域に対する役割に注目した。

このカフェは、街にもっと活気をもたらしたい、街の良さを知る人を増やしたい、というオーナーの思いから始まった。リヤカーを引いて街なかを移動販売しながら、自分の思いを周囲に伝えていき、その思いに共感した協力者を増やしてきた。、少しずつ多くの人を巻き込みながら cafe ころんは生まれ、運営されている。ここを足がかりにしながら、さらに街に多様な活動を広げている。

こうしたプロセスの中で、オーナーと出店者と利用者との間には相互の関わりが生まれ、それぞれの主体が主体的に関与しながら cafe ころんが成り立っている。その関わりの中で、街に対する理解が増え、街に新たな居場所が生まれ、街に人を呼び込み、街に新しい価値観がもたらされている。

cafe ころんは決して大きな取り組みではないが、この場所をきっかけとして、小さな思いの連鎖が生まれ、自分も周りの人も、そして街自体も豊かにするような関わりをつくり出している。

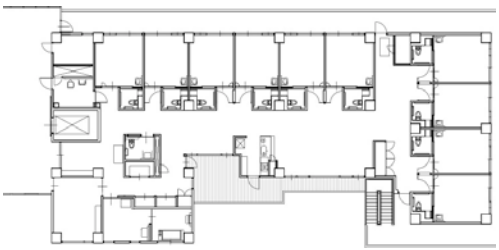




橘　弘志（実践女子大学）

■入居者の生活を豊かにするセミプライベート空間

昨年から引き続き、2012 年度開設のユニット型 M 施設を対象として、リビング環境の改善に取り組んだ。対象は東ユニット（入居者 10 人）2 フロアである。施設側とのワークショップ、入居者へのヒアリングを重ねた上、居場所としてコタツスペース、壁への棚の設置と本や写真などのディスプレイ、居室前へののれんの設置を行い、事前・事後調査によりその効果を検証した。



リビング平面（東ユニット）

コタツスペース

棚飾り

のれん

コタツスペースは、あえて床座とし、座椅子とソファを設置して、在宅時と似た姿勢でくつろぐことを想定した。棚飾りは 2×4 材を用いて壁面に取り付け、本や私物、写真を飾り付け、自由に手に取れるようにした。居室前のアルコーブには、自宅から持参したのれんを設置し、自分の領域を意識できるようにした。

観察調査やスタッフヒアリングの結果、入居者から新たな反応や表情、落ち着き、他者との距離感などが引き出されたことが分かった。それはスタッフにとっても、これまで気付いていなかったことに気付かされる契機ともなったと思われる。

入居者から引き出された反応

	コタツ	棚飾り	のれん
行動	読書・会話 うたた寝 外を眺める	読書・会話 散歩 写真をみる	くぐる 会話
反応・表情	ゆったり 笑顔、安心	笑顔、注視 記憶の喚起	落ち着き 笑顔
姿勢	床に座る 寝転がる	前のめり	見上げる かがむ
他者との距離	足や肩が触れあう距離	一緒に写真を覗き込む距離	

■マンガに見る日本の子供部屋の変遷

子供部屋が定着した高度成長期以降、子供部屋の意味や役割は変化している。1960 年代から 2010 年代までのマンガ 83 品に描かれた子供部屋に注目し、その変遷を辿る。

時間の経過とともに、独立した子供部屋が次第に定着し、個室化、洋室化が進んでいる。それに伴い、就寝が布団からベッドへ、勉強が座机からデスクへと、生活スタイルが変化している。

部屋のしつらえとして、かつて子供部屋の必須要素だった本棚の割合が減少している。いっぽうオープンラックなどの見せる収納が増加している。室内装飾は、花、額縁、ポスターなどが減少し、観葉植物、コルクボード、ガーランドなどのお洒落な装飾へと変化している。

けん玉、ボードゲームなどの遊び道具は減り、電子ゲームが増加する。音楽は、大型のステレオから小型のラジカセ、iPod などの携帯型機器へと推移し、空間を共有する音楽から一人の世界で聴く音楽へと変化した。80 年代に電話、90 年代にはパソコンが現れ、近年は携帯電話へと移行している。部屋内での直接の会話は減り、SNS 等の間接的コミュニケーションへと移行している。

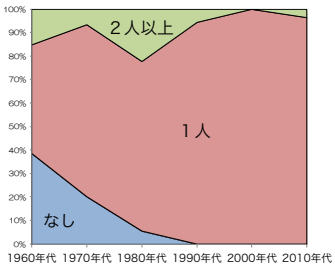
技術の進化や意識の変化は、マンガ内の子供部屋にも反映されている。スマホの普及は、子供部屋に対する意識を大きく変化させる可能性がある。

1960 年代
小学生女子

1990 年代
中学生女子

2010 年代
小学生女子

	作品数	部屋数
1960 年代	10	13
1970 年代	11	15
1980 年代	15	18
1990 年代	10	18
2000 年代	23	34
2010 年代	14	27
合計	83	125



子供部屋の形態

本棚のある部屋の割合

コミュニケーション機器

	電話	PC	携帯
1960 年代	0	0	0
1970 年代	0	0	0
1980 年代	2	0	0
1990 年代	2	1	0
2000 年代	1	6	4
2010 年代	0	1	3

■青少年施設における居場所形成と他者との関わり
■子育てひろばの環境のあり方が親子に与える影響